

演題「ルーシの洗礼と日本正教会の誕生」

舞台にイス並べる。中央に1つ、左右に3つずつ配置する
ストーリー(物語)の説明 (担当:)
弁士(担当:)、登場。机に座る。

第1幕「キエフの宮殿」(紙めくる:)

場所はキエフの宮殿 ウラジーミル大公の会議室。

舞台にウラジーミル()登場。中央のイスに座る。
貴族(1)、(2)、(3)()、
長老(1)、(2)()が舞台に出
て来て、左右にならぶ。

弁士

「日本が平安時代という、華々しい貴族文化を迎えていた頃、ヨーロッパでは強大なフランク王国が統一期を過ぎ、今まさに分裂せんとするところにあった。そんな中、スラブの国では、いまだ民族、宗教が異なる人々によって争いごとが繰り返されていた。

9世紀末期、バルト海からヴォルホフ川、ドニエプル川、黒海へと通じる水系にそって、「ルーシ」の統治が始まる世となった。「ルーシ」とは、まだ今日の「ロシア」という国が形成される前、現在のウクライナのキエフを中心としてできたスラヴ人の国である。

さてさて、「原初年代記」にウラジーミル大公登場。

986年のある日、ウラジーミル大公は貴族と町の長老たちを集めて、こういった。

ウラジーミル大公

「わたしたちの国では、これから正しい信仰が必要です。さて、なにかよい考えがあるか？」

長老(1)

「わたしはイスラムという宗教があることを聞いています。」

長老(2)

「わたしはカトリックという教えがあることを聞いています。」

長老(3)

「正教という教えがあることも聞きました。」

キエフの貴族(1)

「それは、どういうものですか？」

キエフの貴族(2)

「それは、どういうことですか？」

長老(1)(2)(3)

(声を合わせて)「知へらない。」

ウラジーミル大公

「それでは、使いの者を出して調べるのだ！」

長老達

(立ち上がって、礼をして)「かしこまりました。」

ウラジーミル、長老1、2、貴族1、2 舞台を降りる。

第2幕「キエフの宮殿」(紙めくる:)

場所はキエフの宮殿。ウラジーミル大公の会議室。

家来()たちの報告。

弁士	「使いに出された家来は、それぞれの国へと出かけていった。あるものはドイツ、またあるものはイスラム教のブルガール人、そしてユダヤ人のところ、最後は「ツァーリーグラード」、すなわち皇帝の街・コンスタンティノープルへ出かけていった。そして翌年、彼らは再びウラジーミル大公のもとへ戻ってきた。」
----	---

舞台上に、ウラジーミル大公、家来たちが出てくる。

ウラジーミル大公	「ごくろうであった。はなすがよい！」
----------	--------------------

家来1(イスラム教)	「私の行った所は暑い国でした。どうも、あわない。」
------------	---------------------------

ウラジーミル大公	「あなたはどこへ行った？」
----------	---------------

家来2 (カトリック教)	「私はあっちのほうへ行きました。 やっぱりちがいます。」
-----------------	---------------------------------

ウラジーミル大公	「あなたはどこへ行きましたか？」
----------	------------------

家来3 (正教)	「はい。私の行った街は… ああ…なんといい表していいか。私はコンスタンティノープルのギリシャ人のもとへ行きました。大きな聖堂の中へ連れて行かれました。あのとき、私は自分が天上にいるのか、地上にいるのか、わからなくなってしまいました。地上にはあのような、ながめも美しさもない。神は人とともにあり、彼等のおこないはどんな国のものよりも、すぐれております。」
-------------	--

弁士 この間、ビザンティン聖歌が流れる。 (担当:) 舞台上にイコンを持って出てくる。 (担当:)	「最後の家来は、聖堂の中で見た様子を話した。それは「原初年代記」に書かれている。ウラジーミル大公の家来がコンスタンティノープルに着いた時、皇帝は彼等に会って何ゆえにやって来たのかたずねた。家来がいつものことを告げると皇帝はとても喜び、その日のうちに彼等を大いにもてなした。あくる日、皇帝は総主教のもとへ使いを送り、「『ルーシ』の者たちがわれらの信仰をこころみるためにやって来た。教会と司祭たちの支度を整えさせ、彼等に我等の神の栄光を見せるがよい」と言わせた。この知らせを受けた総主教は、司祭達を呼び集めた。彼等は習わし通りに祭日の祈祷をあげ、乳香をたき、聖歌隊を配置した。皇帝はウラジーミル大公の家来達と聖堂の中に入り、彼等を広い場所に立たせて自らの神への奉仕について物語りながら、聖堂の美しさや聖歌の詠唱、総主教と輔祭たちの祈祷の様子を示した。ウラジーミル大公の家来たちは感嘆し、驚きのうちに彼等の行いをたたえた。そこで皇帝は彼等を呼び寄せ、「自分の国へ戻るがよい」と言って、高価な贈物と名誉を与えて送り出した。」
---	--

ウラジーミル大公、家来1、2、3たち舞台から下がる。

<p>第3幕「ドニエプル河での洗礼」(紙めくる:)</p> <p>場所はドニエプル河の岸辺</p> <p>河(小道具)の準備をする。</p>	
弁士	<p>ウラジーミル大公は彼等の話を聞いて、正教の信仰をこの国の教えとすることにしました。</p> <p>間もなく、ウラジーミル大公は洗礼を受けました。</p> <p>そして、町に使いを送り、人々にも洗礼を受けるよう、おふれを出しました。</p> <p>翌日、ウラジーミル大公が司祭や修道士たちと共にドニエプル河に出て行くと、数知れぬ群衆が集まっていました。</p> <p>彼等は流れの中に入り、ある者は首まで、他の者は胸まで水につかり、幼い者たちも岸の近くで水につかりました。</p> <p>赤子を抱いている者もいました。</p> <p>大人達は河の中を歩き回り、修道士達は立って祈りを捧げていました。</p>
<p>弁士が話している間に、</p> <p>舞台にウラジーミル大公、貴族1、2、町の人々()が出てくる。</p>	
キエフの貴族1	「ウラジーミル大公は、このすばらしい信仰を受けました。」
キエフの貴族2	「わたしたちも洗礼を受けましょう。」
<p>町の人々、貴族1、2、舞台の下に用意した河に入る。</p> <p>(※ウラジーミル大公は舞台にいる。)</p> <p>(洗礼の順番 →)</p> <p>河から上がった後、司祭()のそばに行き、十字架のネックレスを首にかけてもらう。</p>	
弁士	<p>「こうして「異教」の時代は終わり、人々は正しい信仰を得ることが出来ました。</p> <p>ウラジーミル大公は聖なる洗礼を成し遂げたものとして、後に聖人になりました。</p> <p>彼は「亜使徒」すなわち「使徒に等しい者」と呼ばれるようになりました。</p> <p>ウラジーミル大公の洗礼により、やがて正教はロシアの地に広く伝えられ、すでに千年の歴史を超えました。</p>

第4幕「箱館」(紙めくる:)

場所は1861年の箱館。

弁士

この間、「聖ニコライのトロパリ」を流す

話は飛びますが… 1861年の日本。
私たちの住む函館に、ロシア人の修道司祭がやって来
ました。
その名は、ニコライ・カサートキン。
私たちの国・日本に正教を広め、亜使徒日本の大主教
聖ニコライとなりました。
ウラジーミル大公と同じく、亜使徒のタイトルがつけられ
た聖人です。

舞台に「亜使徒日本の大主教聖ニコライ」の写真、登場。

続いて、舞台に澤邊()、酒井()、浦野()の3人が出てく
る。胸にそれぞれの名札をつけている。(聖名の所は、テープでかくしておく。)

澤邊

「このニコライ神父の伝える教えは正しい。
私たちも洗礼を受けて、正教のハリスチアニンになろ
う。」

酒井、浦野

「はい！」

澤邊、酒井、浦野の3人、ニコライ神父様より、十字架のネックレスを首にかけても
らう。名札のテープを取る。

弁士

このようにして、ギリシャ、ロシア、日本に於いて、正教の
教えは伝播されました。
そして、今日も多くの人が、正教のお祈りをして、神さま
を讃美しています。
来年は聖ニコライの渡来150年を迎えます。
みんなでお祝いしましょう！

出演者、全員出てくる。「ムノガーヤ・レータ」を歌う

マルファ佐藤姉:「キャストの紹介をします。

ウラジーミル大公:ティモフェイクン

町の長老及び澤邊琢磨:ミハイル佐藤和樹兄

町の長老及び酒井篤礼:マリヤ松井愛民

貴族及び浦野大蔵:セルゲイ松井勘太郎兄

貴族:アナスタシヤちゃん

貴族:ポリーナちゃん

洗礼を受ける赤子とお母さん:

キリルくんとお母さんのエカテリーナさん

司祭:ニコライ神父

イコン持ち:ヴロヴァレツ領事

ストーリー紹介:マルファ佐藤直美

弁士:ユリヤ松井真佐子

小道具:ニコライ松井靖介

音響:アキラ吉川輔祭

題字:アンヴロシイ花野英昭

脚本及び舞台監督:

ニコライ神父・ユリヤ松井真佐子

以上の豪華キャストでお送り致しました。ご清聴ありがとうございました」。